

ふくしまの、あの日から今、そして大切なもの ふくしま「ふるさと写真の日」展

ふくしま避難者のふるさとアイデンティティのつながり継承



五十五年一緒のお隣さん
芳子さんと仮設住宅でもお隣さん
飯館村：菅野榮子さん・菅野芳子さん

私たちひとりひとりの心に潜む「ふるさと」という記憶の深い場所での大切なものたちとのつながりを「写真」を通して掘り起こし、その思いを根付かせ、育み、伝えていく「ふるさと写真の日」プロジェクト。その最初の起点とした場所は福島でした。

今年で6年が経過しようという東日本大震災。被災地の中でも福島県の12市町村（田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楳葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯館村）の方達は原発事故に伴い、避難を余儀なくされました。

被災後、故郷、自宅を離れ、他の市町村で暮らし、避難指示がいまだ解除されない町、すでに帰村の始まった村、今年から帰村が始まる村など状況は様々です。

長い避難生活によって祖父母世代、親世代、子孫世代で大きく認識が変わりつつある「ふるさと」を、自分たちのアイデンティティとして触れ、確認し、伝えるきっかけにしようという福島県被災12市町村の「ふるさとアイデンティティのつながり継承事業」では、親子の写真を34年間撮り続け、大切なものとの関係を撮ってきた写真家ブルース・オズボーンさんに撮影を依頼。

ブルースさんが、2011年の震災直後に福島を訪れて撮影した方達との6年間の交流の中で撮影

してきた写真と「ふるさとアイデンティティのつながり継承事業」で、昨年末に新たに撮りおろした写真を加え、ふくしま「ふるさと写真の日」展として東京・郡山・福島の3ヶ所にて巡回展示いたします。

様々な困難を通られた、相馬市、南相馬市、飯館村、葛尾村、川内村の方々が被災地にあっても、なお前向きに凛と立つ姿を是非ご覧ください。

更には、その被災地の方、撮影させていただいた方が自らまとめた書籍や写真なども併せて展示し6年経過してもなお、現在進行中である福島の今を立体的に知っていただける機会ともなります。

ふくしま「ふるさと写真の日」実行委員会

実行委員長 丸岡一志（郡山市在住）
実行委員 市澤秀耕（福島市在住）
実行委員 佐藤健太（福島市在住）
実行委員 高橋 翔（葛尾村在住）

主催：ふくしま「ふるさと写真の日」
実行委員会

会場：東京・郡山・福島

会期：2017年2月6日(月)～26日(日)
会期中3会場を巡回（詳細下記）

入場：無料

Staff:

写真家コーディネート	梶原美紀
撮影プロダクションマネジメント	井上佳子
東京写真展プロデュース・広報	梶原美紀
福島写真展プロデュース・広報	五十嵐隆男
東京・郡山写真展ディレクション	草野紀親
デザイン（パネルデザイン・Web）	丸岡事務所

協力:

東京写真展会場：GLOCAL CAFE
特定非営利活動法人アップタウン青山コンシェルジュ運営
郡山写真展会場：福島コトひらく
特定非営利活動法人コースター運営

ふくしま「ふるさと写真の日」展・開催日程

〔東京展〕 2/6(月)～2/12(日) 9:00～20:00 [最終日は16:00で終了]
会場：GLOCAL CAFE: 東京都港区北青山 2-10-29
ライブラリースペース

〔郡山展〕 2/14(火)～2/19(日) 10:00～21:00 [最終日は17:00で終了]
会場：福島コトひらく: 福島県郡山市富久山町久保田字下河原191-1
1Fオープンラウンジギャラリー

〔福島展〕 2/21(火)～2/26(日) 9:00～17:00 [最終日は16:00で終了]
会場：コラッセふくしま: 福島県福島市三河南町1番20号
2/21～23 会場は1Fイベントホールアトリウム [2/23(木)は13:00迄]
2/24～26 会場は5Fプレゼンテーションスペース

※ 3/4(土)～3/31(金)には、日本外国特派員協会（FCCJ）展があります。日程不都合の方は、その機会をご利用ください。詳細は Web にて。

本事業は、経済産業省・平成 28 年度 地域経済産業活性化対策費補助金（被災 12 市町村における地域のつながり支援事業）の交付を受け実施します。
執行団体：株式会社ジェイアール東日本企画・地域経済産業活性化対策費補助金（被災 12 市町村における地域のつながり支援事業）事務局

招待写真家

ブルース・オズボーン
<http://www.bruceosborn.com/>



Art Center College of Designで、コマース写真専攻。1980年の写真展「LA Fantasies」をきっかけに、日本での活動を本格的に開始。1982年から始めた「親子」写真の撮影は今年で34年目になり、撮影した親子の数は6000組を数える。2003年より7月の第4日曜日を「親子の日」として提唱したオリジナルターで、記念日協会にも登録。2014年に同協会から「記念日文化功労賞」を授与。「親子」をテーマにした写真展は、外国人特派員クラブ、横浜ランドマークタワー、山梨県立美術館、金沢21世紀美術館、愛・地球博園内愛知県児童総合センターなど、各地で数多く開催。2011年の6月から、「親子の日」公式プロジェクトとして被災地訪問を実施。また、「I TIE ☆ 会いたい」では、被災地でワークショップを実施。写真を中心に、子どもたちのネットワークづくりを構築。親子をテーマに撮影した作品とソーシャルアクションに大きな期待が寄せられている。

2016年11月3日、文化の日に東京運営文化褒賞を受賞。写真家としての功績と「親子の日」を通じた社会的活動が評価され授与される。

<https://www.furusato-photoday.com/>

本展開催にあたって

私は海で生きてきた者だから
海への恨み辛みっていうのは無いんです。

南部房幸さん

2011



2012



2016



photo by BRUCE OSBORN / Ozone Inc.

今回、本事業の撮影にお招きした写真家ブルース・オズボーンさんとの撮影行脚の道中、被写体として撮らせていただいた方たちと言葉を交わす機会が多くありました。その中で印象に残った言葉があります。

2011年の被災当時、相馬双葉松川浦漁業協同組合会長だった南部さんが新しく建てたご自宅での歓談中にふと漏らされた「私は、海で生きてきた者だから、海への恨み辛みっていうのは無いんです」という言葉が、深く心に残りました。

2011年の被災直後の崩れ落ちた漁港の市場でのご家族の写真、その翌年の仮設住まいの時の写真、そして2016年の写真。

5年半以上の時の経過の中で、津波による被災後、新しい家を見て住まうまでの暮らしや仕事の中で多くのご苦労があったであろう事が想像される3枚の写真。その中に静かに立つ、長らく海の男として生きて来られたその方の、海がもたらした津波という災厄も、海からいただいていた恵みも、その海から与えられてきた一切を受けいれてあることが伝わる清々しい一言でした。

東日本大震災と、その後の原発被災から早くも6年が経過しようという今年。震災の記憶も風化しつつある、という指摘もあります。しかし、そのような歳月を経た後にしか、語りえない言葉や思いもあります。

松川浦から望む開かれた海と共に、人生そのものがあった、その海の人の「ふるさと」である松川浦漁港市場の再建されたその場所での写真と、語られたその言葉が古びることはありません。

全ての人が等しく親や家族、生まれ故郷といった、自身では選べないそれらを与えられて生を享け、人生という旅路を歩みます。

福島に生きていた私達に突然訪れた2011年3月11日と、その後の歩みは百人百様であり、一括りに語ることではできません。

特に原発被災によって自宅を離れ避難生活を送らざるをえなくなった被災12市町村の方たちにとって、その「ふるさと」との関係は複雑なものとなりました。

今回、撮影させていただいた16組の方々、また本展で展示する書籍の著者の方々。そのいずれの方からも、外からは大変で、困難な場所として映る、福島のそれぞれの「ふるさと」の場所を、それぞれが尊び、大切に生きておられる様子がうかがえます。

その大切で、尊ぶ場所を持つ方の、思いや言葉は、決して古びることのないものであると信じます。

本展を通じて、その古びることのない「大切なもの」について思いを馳せ、その一端に触れ、何かを持ち帰っていただけるのであれば主催者としてはこの上なく幸いです。